2025年1月12日（日）諏訪教会　降誕節第3主日礼拝

**「主イエスを愛し続けて」**

聖　書　詩編　第56編1～9節

ルカによる福音書　第7章36～50節

讃美歌　191、204

石井佑二

　本日は東海教区伝道部による、南信分区への問安の中で、この諏訪教会において御言葉の説教の奉仕ができますこと、心から感謝いたします。諏訪教会での説教奉仕が決まりまして、この教会のことを思い巡らして来ました。その中で、教団出版局から出されている『信徒の友』という雑誌の2022年11月号の特集で、この諏訪教会のことが記されていましたので、拝見いたしました。当時の川村牧師や、教会員の皆さんの写真や言葉が記されています。大変興味深く読みました。その記事には諏訪教会の歩みが記されています。その伝道の開始のこと、神友会（しんゆうかい）のこと、会堂建築、牧師館建築のこと。喜びもあり、労苦も、悲しみも、沢山のことがあった歩み。これらの記事で私が一番印象に残ったのは、教会員の皆さんの写真です。穏やかな明るさがにじみ出てくるような表情をされている。しかし添えられている言葉を見れば、いつも元気一杯であった、ということではない。しかしそれでも、教会に連なり、喜んで生きている。そんな思いが伝わってくる様な思いがしました。この取材をした記者がこう書いています。「教会員の言葉の端々に、礼拝への、また説教への期待が表れる。教会で力を与えられたい。苦しい時にこそ、確かな神の言葉に聴きたい」。そういう思いを感じた、と言うのです。ああ、良い教会だな、と思いました。御言葉に聴く、その礼拝の姿勢において示される、教会員皆さんの生き生きとした姿が現われているのだな、と思わされました。

　私はこの様な諏訪教会の皆さんのことを思い、本日の礼拝のために祈り、ルカによる福音書第7章36節から、その終りまでの御言葉が与えられました。この御言葉は不思議な魅力に溢れた箇所です。教会の長い歴史を通じて、多くの人たちが現実の苦しみの中で、しかしのこの御言葉に聴き、生きる力を与えられた。そのことを証しする言葉が沢山書き記されています。今日、私たちも、同じ励ましを、ここから聴き取りたいと願います。

お読みいたしましたこの御言葉。シモンという名前のファリサイ派の人が、自分の家に主イエスを招いて食事をしていました。このシモンは、主イエスとは多くの場面で対立をするファリサイ派の一人でありましたが、恐らくはそうでありながらも、この主イエスを慕う思い、尊敬する思いを抱いていたのだと思います。ところがその食事の席に一人の女性が現れ、38節「**後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った**」。その様なことをしだした、と言うのです。この女性の行為、その場面をイメージしてみると、異様な出来事が起こっている光景だと思わされます。しかしこの出来事が切っ掛けとなり、ファリサイ派シモンと主イエスとの間に、忘れがたい対話が生まれたのです。

　先程、この聖書を朗読していただきましたが、その言葉を聞いて、皆さんの心の内に、様々な思いが生まれたのではないかと思います。礼拝において、説教を聴き取るにおいて、聖書の御言葉によって思いを巡らす、ということはとても大切なこととなります。黙想をする。色んな事を考えてみる。この時の主イエスの思いはどんなものだっただろうか。自分はこの御言葉の中の登場人物の誰に当たるだろうか。涙する女性か、ファリサイ派シモンか、主イエスの弟子たちか、その食事に同席したその家の人々か。

　当時の人たちが食事をする時には、私たちが椅子に座ってテーブルで食事をするのとは違って、床にごろんと横になって、片方の肘をついて半身を起こし、もう片方の手で食べ物を取って、それで食事をしていました。その時足は、食べ物がある方とは反対側に伸ばされています。その様な姿勢の中にある主イエスの足もとに、一人の女性が香油を持って近づきます。そして主イエスの足を、自分の流す涙でぬらし、それを自分の髪の毛で拭い、その主イエスの足に香油を塗ったというのです。御言葉を思い巡らす中で、私も一つ思ったことがあります。それは、このことをするのにどれ程の時間が掛かったのか、ということです。1分や2分で終わるようなことではなかったでしょう。詳しいことは聖書に書いていません。私たちの黙想、想像力を良く働かせて思い巡らしたい。この時のこの食事の場、それまでは賑やかであったかもしれない。しかしこの涙する女性が入ってきた時から、誠に静かな、そしてとても長く感じる時間が流れたのではないかと思います。ここにいた誰もが驚き、戸惑ったことでしょう。しかし誰も声を出せないままに、時が流れるのです。

　けれども何よりもここで、この人々を驚かせたのは、主イエスがその女性を黙って受け入れておられたということだと思います。5分、10分、15分。静かな、しかしこの女性の切迫した思いが表わされる時が流れます。静けさの中で、この女性のむせび泣く声があったでしょうか。足に接吻する音、香油を注ぐ音が、静かにその部屋に響きます。この静けさとは正反対に、人々の心の中は静かではなかった。「この女性は何をしているのだろうか。なぜこんなに泣いているのか」。37節に、この女性は「**罪深い女**」だったと記されます。何の罪を犯していたのかは分かりません。しかし皆、この女性のことをその様な者として知っていました。その様な人が、ここで涙しながら主イエスの足もとにすがりついている。そしてこの女性を黙って受け入れておられる主イエスというお方は一体何者だろうか。様々な思い巡らしが、周りにいる人皆において果たされていた。その時が流れました。

　この時を、主イエスご自身は何をお考えになっておられたのでしょうか。この女性の涙をどのように受け入れておられたでしょう。また周りの人々の戸惑いの心の声を聴き取って、どのように感じておられてしょうか。主イエスは、人々に罪の悔い改めを求めます。この女性の涙を、その様に受け止め、その悲しみを受け止めながら、しかし信仰が表わされたことに喜ばれたでしょうか。あるいは主イエスは、この女性の罪の赦しのためにも御自分が十字架に架けられて殺されるのだ、ということをむしろ重く、悲しく受け止めておられたでしょうか。そんな主イエスの喜びと悲しみが入り交じるような心を黙想することが私たちに求められているのではないかと、この聖書の御言葉を読んで私は思いました。

　先程も申しましたが、このルカによる福音書の記事は、教会の歴史の中で多くの人たちに愛され続けている御言葉です。この御言葉について、多くの人が沢山の言葉を残しています。人の心を捉えて離さない、不思議な力を持った記事です。ある人が、この聖書の記事について文学的な表現でこのように言います。「この女性が主イエスの足もとで流した涙、その一粒一粒に、彼女の人生の物語が込められていた。深い悲しみ、苦しみ、心の渇き。何よりもここには彼女の罪を悔やむ思いが込められていた」。そう言うのです。この女性の人生全体が凝縮したような涙であった。何よりも自らの犯した罪を悔やんで流された涙。しかし重ねて、この人はこう言うのです。「その涙が、ここで主イエスを愛する献げ物となって、その足もとに流された」。このことを私たちも深く捉えたいのです。この女性は主イエスを愛していたのです。そしてその愛を受け止めていてくださる主イエスのお姿に、本当に多くの人たちが慰めを与えられてきた。ここに、私の姿が描かれている。主イエスに対して、この女性と同じ様に涙を流すことが出来るように、私は招かれている。そう捉えることができるのです。この女性はきっと、いつも泣いてばかりいた人ではなかったと思います。もしかしたら、何十年も泣くことが出来ないままに人生を過ごした人であったのではないかとさえ思います。人々から後ろ指を指されながら、けれども一所懸命に生きて来た。しかしそこで、その心は硬く、冷たくなってしまい、耐え忍んで生きて来た。けれども主イエスの前に立った時、この主イエスと出会った時、心が温められて、初めて自分の罪を思い、その罪を自分で見つめ、自分自身の人生の悲しみを思って、涙を流すことを知ったのです。その罪を悔い、もう一回、新しく人生を生き直したい。そう思えた。この主イエスは、本当に私の心を知り、受け止め、そしてこの罪を赦してくださる。この悲しみの涙をも、私の愛の表れとして受け取ってくださるこのお方の前でなら、安心して涙を流すことが出来る。私たちが心を打たれるのは、この女性の涙そのものではなくて、それを受け止めていてくださる主イエス・キリストの心なのです。このお方が、今、私たちとも出会ってくださる。

　しかしこの時、この食事の場を用意したファリサイ派シモンは、ここで何が起こっているのか理解することが出来ませんでした。だから主イエスはシモンのために、一つのたとえ話を用いて説明をしてくださいました。41～43節「**イエスはお話しになった。『ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。』シモンは、『帳消しにしてもらった額の多い方だと思います』と答えた。イエスは、『そのとおりだ』と言われた**」。この主イエスのたとえ話は、単純に考えれば、五百デナリオンという金額の借金を許してもらったのがこの罪深い女性の方で、五十デナリオンの借金を許してもらったのがファリサイ派シモンであると、読むことが出来ます。あまりそれは明確ではありません。しかしここで主イエスが明らかにし、メッセージとして伝えようとされるのは、「多く罪を赦された人は、多く愛することに生きる」ということです。47節で言います。「**だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない**」。もしかしたら、このたとえ話において、ファリサイ派として、より神に対して罪を犯すこと少なく生きて行こうとしているシモンの方が、五十デナリオンの借金を許された人にたとえられているのかもしれません。しかし主イエスがシモンに対して言いたいのは、あなたは、もっと多く罪を赦される事に生きて欲しい、そしてもっと大きく私を愛して欲しい、この涙する女性のように、ということです。その様にしてシモンを招いていてくだっているのではないかと私は思うのです。そしてこの招きを、私たちも今、いただいている。招かれたら、その招きに応えたら、一体私たちに何が起こるのでしょうか。この招きに応える勇気があるだろうか。多く赦されなければならない自分自身であるということを受け入れることが出来るだろうか。そのことにたじろいでしまうかもしれないと思う程に、強い、主イエスの御言葉が語られます。

　主イエスは44節前半でこうも言われました。「**そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。『この人を見ないか』**」。シモンは、確かにこの女性を見ているのです。しかし本当の意味で、この女性の、罪に悲しみ、涙が流されているその姿、その涙を全部受け入れるお方、主イエスとの出会いの中で、主イエスへの愛の信仰が告白されているその姿を見ているか。そう問われているのです。あなたに、本当に気付くべき事に気付いて欲しい。44～46節「**この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた**」。主イエスはここで、この女性のことを見て欲しいと言われながら、明らかに、シモンにも、私たちにも、泣くことを求めておられます。主イエスを愛するがゆえの涙、多く赦されたがゆえの涙を、あなたも流して欲しい。そう言うのです。

　主イエスが、あなたも涙を流して欲しいと願われる。それは奇妙な願いでしょうか。そうではないと私は思います。この世を生きる私たちは、涙を失っている。主イエスと共に流すべき涙を流すことが出来なくなっているのです。あなた自身で、本当に悲しむべき事を、いつも、いくつも抱えているのに、その悲しみを悲しむことができないでいる。そのことを主イエスは嘆いておられる。だからこそ、今日の聖書は言うのです。ここで語られる、罪深く、涙する女性の姿。「**この人を見ないか**」。この人を通して、あなたも同じく主イエスに、自分の罪の重荷を下ろし、主イエスと共に涙する事、この主イエスへの愛に生きること、そこへの招きが語られるのです。

　ある人が、この聖書の箇所を説き明かして、こう言います。「この女性は神の世界に生きた。神の恵みの世界に生きた。ファリサイ派は神を信じると言いながら、この世に生きた。自分の業に生きた。自分が作り出す人生の値打ちを喜んだ。この女性は神の造った世界に生きた。自分の罪のゆえに自分を失っていたけれども、今は見出されている。神に見出されている。愛を失っていたが今は愛されている。そして愛することを知ったのである。ファリサイ派は他の色々なものが気になった。この女性は他の何も気にならなかった。主イエスの罪の赦しだけに心を集中して生きた」。教会が語るのは、この主イエスだけです。この主イエスを愛し続けること、その招きだけです。もっと多く罪を赦され、もっと大きく主イエスを愛する者になってもらいたい。そう招く主イエスが、今、私たちと出会ってくださるのです。

　お祈りをいたします。

　主イエス・キリストの父なる御神。私たちの罪の大きさを本当にご存じであられるあなたが、それ以上の大きな赦しとして、御子をお遣わしくださり、私たちのすべてを受け止めてくださります。私たちは自分の罪に涙することが許されています。主イエスへの愛をそうして表わすことが許されています。この恵みの招きの中で、新しく人生を生きる力が与えられる、その信仰に立つ、私たちであらせてください。

　全てを感謝して、この祈り、尊き主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。